NO.11

2026年1月
編集長：河野絵理子

長野反核医療者の会 会報

目次

第35回反核医師のつどいin東京 報告
学生部会フィールドワークin長野 報告
会員インタビュー企画！ 第1弾

反核医師のつどいIN東京
被爆80年、継承をテーマに開催

8月30～31日、東京にて、第35回反核医師のつどいが開催されました。テーマは「被爆80年 反核平和運動・被爆者支援・被爆医療の歴史を学び継承しよう！」で、全国各地から医療者が集まり、長野からもオンライン合わせて11人が参加しました。

1日目は、まずノーベル平和賞を受賞した日本被団協の田中熙巳さんからご挨拶があり、反核を継承でなく今を生きる世代の課題として、一刻も早い廃絶を世界の市民が選び取る必要性を訴えられました。

企画1つ目は広島と福島で被爆者と共に歩んできた医師の斉藤紀さんの講演、そして講演後は当会のメンバーでもある若手医師の河野絵理子さん、医学生の松久凌大さんと核廃絶と「継承」をテーマに対談しました。長野県出身の河野さんと松久さんは満蒙開拓や強制労働、被爆証言との出会いから自ら行動するの必要性を実感し、反核医師の会の活動に参加してきました。斉藤さんからは、被爆者医療を支えた医師たちの実践、原爆裁判の医学的たたかい、ガザや福島への問いも共有され、被爆者を偶像化せず同じ市井の人として寄り添い、今ある戦争や排外主義を止めることが核廃絶運動の本質だとお話がありました。

企画2つ目は日本反核法律家協会会長の大久保賢一さんから「“原爆裁判”を現代に活かす」と題して講演いただきました。法律家の立場から、原告の被爆者とそれに寄り添ってきた弁護士が原爆投下の違法性と国の責任を問うた原爆裁判の意義や、現在の被爆者援助制度や核兵器禁止条約の成立にまでつながってきたという司法での核兵器とのたたかいの歴史についてお話しいただきました。最後に「核の時代の非軍事規範である9条を土台に、原爆裁判をルーツにもつ核兵器禁止条約を普遍化し、核兵器も戦争もない世界を一刻も早く実現しよう」とメッセージをいただきました。（中里美郷：長野反核医療者の会）

シンポジウムの登壇者
長野反核医療者の会メンバーが
大活躍！

2日目には、俳優の斉藤とも子さんによる記念講演、若者と会場の対談企画が行われた。

斉藤さんは、まず被爆者との出会いを通じて強い関心を抱き、さらに故・肥田舜太郎医師との出会いと交流を重ねる中で、そのまなざしをいっそう深めていった。講演では、被爆者の声に耳を傾け、自らの生き方を問い直してきた歩みを振り返りつつ、核被害にとどまらず、原発裁判に関わる中で広がった視野を語った。「痛みを知る人は他者の痛みを見過ごせない」「私が使っていた電気で福島の人が被曝した」という言葉が、静かな重みをもって胸に響いた。

対談企画「いっぽいっぽ考える、私たちの平和と政治」は、第3回核兵器禁止条約締約国会議に参加した若者たちが体験を共有し、核問題を多角的に考える場として開催された。登壇者は、広島での暮らしを契機に議員への政策聴取を行う田中美穂さん、中学の修学旅行をきっかけにジェンダー×核で活動する徳田悠希さん、署名活動から米国核被害者調査へと歩みを進めた本間のどかさん、医療と核問題の接点を探る森爽さん、現地参加で連帯の必要性を実感した荒木さくらさんである。国際会議の熱気と国内の温度差、歴史否認や英語格差といった課題に向き合いながら、SNSや他分野との連携で裾野を広げ、被爆者への敬意と「言葉の力」を重んじる姿勢が印象的だった。出会いを一過性にせず連帯を築き、小さな対話を積み重ねながら、語り継ぐ覚悟を、会場の参加者ともども、新たにした。（松久凌大：会員、反核医師の会学生部会事務局長）

対談企画の登壇者たち
一番右は、コーディネーターを務めた丸橋郁弥さん（長野反核医療者の会事務局メンバー）

学生部会フィールドワーク 初めて信州で開催！

9月13日～15日に、反核医師の会学生部会のフィールドワーク（FW）が長野県内で開催されました。学生部会ではこれまで主に広島と長崎で毎年交互にFWを実施してきましたが、今年は新しい試みとして被爆地以外での企画となりました。企画は全て学生部会の日頃のオンラインミーティング等で学生自身が計画・準備してきたもので、特に、長野反核医療者の会の会員であり、学生部会事務局長松久凌大さんの尽力で行われました。このFWは「戦後80年に問う歴史との向き合い方」というテーマで、日本の加害の歴史に視点を当てたスケジュールでした。

1日目は無言館を訪れ、夜には長野反核医療者の会共同代表の木下真理子さん、事務局メンバーの光武鮎さん、河野絵理子さんと、学生部会代表の森爽さんとの対談企画が行われました。医師による戦争加害の歴史や、今現在仕事と平和活動をどのように繋ぎ合わせて活動しているかなどについてのお話がありました。学生からも活発な質問が飛び交い、濃密な時間になりました。

2日目は松代大本営を訪れ、長野反核医療者の会の会員である中瀬将史さんが案内人として参加してくださいました。午後には元731部隊の少年兵である清水英男さんの講演をお聞きする予定でしたが、体調を崩されたため急遽インタビュー動画の視聴となりました。戦争を語る世代のお話を聞く機会として最後の日が迫っていることを実感し、参加者も真剣に聞き考える時間となりました。

3日目には満蒙開拓平和記念館を訪れ、満州で生まれ育ち逃避行を経験された語り部の橋本さんが、当時の環境や平和への想いを語ってくれました。その後、まとめのディスカッションではFWを通しての思いを共有し、私たちの未来にどう生かしていくかということを考えました。

その他にも、夕食交流会の時間やバス内の移動の時間に、学生部会のメンバーが分科会ごとの学びを共有するなど、この3日間を通して非常に大きな学びがあり、交流も含めて濃密な時間になりました。

次ページに参加した医学生の感想を掲載します。

世代を超えて対談する長野反核医療者の会のメンバー

松代大本営を中瀬将史さん（長野反核医療者の会会員）の案内で見学

フィールドワークに参加した医学生の感想

戦後80年。戦争に対する考え方・捉え方が特に若い世代を中心に大きく変わりつつあることを今、医学生として大学で学んでいく中で強く感じる。先日、英語の授業の中で戦争に関するテーマでディスカッションを行う機会があった。クラスの中で「戦争に繋がりうる軍事費拡大に賛成」するとして手を挙げた医学生が９割以上を占めていたことには少なからず衝撃を受けた。賛成の理由は「中国が不穏な空気を出していることをニュースで見たから。」、「もしもの時、戦う力があった方がいいから。」などとと言ったもの。彼らが「戦争」についてどういったイメージを抱いているのかはわからない。少し意地悪だったかもしれないが、小さなグループに分かれて話し合った際、賛成に手を上げた学生達に「もし仮に、日本と他国の間に戦争が起きたとして、その時、自分のパートナーや子どもが戦地に送り込まれる可能性についてはどう思う？」と質問を投げかけてみた。きちんと受け取ってくれたはわからない。ただ、明確な答えをもらうことはできなかった。

一度でも戦争が始まってしまえば、引き返すことも、止めることも非常に難しい。これはロシア・ウクライナ戦争から明らかだ。また、殺し・殺されの帰結としての憎しみのループは80年経っても遺恨を残す。それは大戦の歴史から明らかなのではないかとも思う。日本は、他国と比べ「戦争、平和、核」と言った話題を特別視（タブー視）する傾向が強いと感じる。どんなことであれ、その分野に直接飛び込んでみて、その時点での自身のスタンスを、公言するしないにせよ、持っていることは「人として」重要なことと考える。だからこそ、医学を学ぶ機会を得た長野で、「反核FW」に参加してみようという気持ちは、この存在を知った時から胸のどこかにあった。そして個人的にはこうした企画を発案し、実際の開催にまで漕ぎつけた運営の方々に対する尊敬の気持ちが強かったのも参加への後押しとなった。

戦争を知る語り部の方々は益々歳を重ねていく。そのお話を、血の通った経験を、本人の言葉で聞くことのできる機会はこれから加速度的に減少していくだろう。「誰かの、真に迫ったお話を聞き、FWの中でも、どんな機会でも構わないが、自身の五感でもって、『自分事として考える』」ことでしか形成できない精神的な部分がきっとあると自分は信じている。おそらく、医学生をはじめとした今の学生に足りないのはこうした経験だと思う。自身のコンフォートゾーンを飛び出した先にしか、本当の意味での成長はない。それを強く感じた素晴らしいFWだった。企画・運営に携わった全ての方々に感謝します。

私は、反核医師の会フィールドワークの２日目に参加させていただきました。これまで他の学生の発表などでしか触れてこなかった出来事を、現地で実体験として感じる貴重な機会になりました。

最初に訪れた松代大本営は、名前は知っていましたが、行ったことのない場所でした。狭い入口と対照的に中は広く、ひんやりとして空気が澄んでいました。しかし、解説を聞くにつれ、その静けさが当時の過酷な労働の上に成り立っていることを強く意識させられました。日本人だけでなく、朝鮮人の方が劣悪な環境で強制的に働かされていたこと、硬い岩に残る太いダイナマイトの痕跡、もうもうとした粉塵に包まれ先の見えない中で作業していたこと、名前の残らなかった犠牲者、生き残った人々も肺を侵され長く生きられなかったこと。その一つひとつが重く胸に残りました。公開には地元の高校生たちの働きかけがあり、地域の方も語ることに抵抗があったと聞き、今この場所に立てていること自体が大きな意味を持つのだと感じました。

その後、731部隊に関わった清水英男さんのインタビュー映像を見させていただきました。清水さんの語り口は数十年前の過去を話しているとは思えないほど生々しく、若い頃に経験した出来事がどれほど深い傷として残り続けたのかが伝わりました。家族にも話せなかった苦悩や罪悪感を、語り始めたという事実は、清水さんの想像できないほどの覚悟や、戦争が個人に与える影響の大きさをあらためて考えさせられました。

夜の学生部会の発表では、戦争と貧困のつながりなどについて説明を受け、これまで自分があまり意識してこなかった側面に気づくことができました。社会の在り方を考える必要性を感じました。今回のフィールドワークに携わってくださった皆様に深く感謝申し上げます。ありがとうございました。

第1弾

会員インタビュー企画！

長野反核医療者の会は発足から5年目となり、会員は60人を超えています。一方で、「長野県は広くて、会員同士集まる機会が年に1回の総会くらいしかない」「せっかく会員になってもらったのに、お互いのことを知る機会が少ない」という意見が聞かれています。この度、会員の皆さんについてより深く知るために、インタビューをしてみよう！ということになりました。

インタビュー記事を読んでの感想を、ぜひ事務局にお送りください。次号以降の会報で取り上げさせていただきます。いつか皆さんのところにもインタビューに伺います！

送付先：info@panw-nagano.com

◉斉藤 友子さん　（上の写真の右）
（上田生協診療所　看護師）
老健なないろでの勤務などを経て現職。2025年8月の原水爆禁止世界大会（以下、原水禁世界大会）に法人の代表として参加した。

◉師岡 美紀さん　（上の写真の左）
（長野反核医療者の会事務局メンバー、上田生協診療所　看護師）
看護学校卒業後から上田生協診療所に勤務しており、2025年7月から同師長。2025年4月から長野反核医療者の会事務局メンバー。

◉河野 絵理子　（下の写真）
（長野反核医療者の会事務局メンバー、長野中央病院　医師）
医学部卒業後、長野中央病院に入職。2025年4月から埼玉県の川口診療所で家庭医の研修中。長野反核医療者の会発足に関わった。

～反核平和の第一歩～

河野：これまで、平和や核廃絶についてどんな関わりがあったか、教えてください。

斉藤：平和や核廃絶について考えるきっかけになったのは、東日本大震災から5年後の2016年に、医療生協の研修で福島視察に参加したことでした。楢葉町、大熊町など、5年経っても大きな船が地面にあったり、工場が斜めになったまま立っていて、ほぼ更地の荒れ野原に家が残っている、という光景を目の当たりにしました。原発事故で帰還困難区域になったことで助けに入れず、そのために亡くなった命もあったと知りました。緑豊かな地域に、汚染土が入った黒いフレコンバッグが並んでいることにも衝撃を受けました。核のゴミの問題や、世界中にも原発があるという状況を知って、福島と同じことが繰り返されないために反対しなければいけない、と強く思いました。福島原発事故後の廃炉作業にも、ものすごく時間がかかっています。人間が制御できないものを作ったり、さらに再稼働しようとしているのはとんでもない話です。核兵器も原発と同じように人類を破滅させるものだから、これ以上作らない、使わないというところにシフトしないといけないと思います。

師岡：斉藤さんは福島に行った後、自分の時間を使って、診療所だけでなくいろいろな事業所で報告会をしてくれました。たくさんの職員の心に響いたと思います。わたしは小学校5年生の時に、父に長崎の原水禁世界大会に連れて行ってもらったことが、反核平和に関わる第一歩でした。原爆資料館に入った途端、子どもながらに「どうしてこんなことが起こったんだろう」と衝撃を受けました。また、被爆者の言葉が心に刺さり、何か自分にもできることはないかと考えるようになりました。長野に帰ってきてから、核廃絶の署名や6・9行動に父や弟と一緒に参加するようになりました。高校生の時には、学校の先生や知り合いからカンパを集めて、仲間と一緒に広島に行きました。広島の平和ゼミナールの人たちに出会って、とても元気だしよく勉強していて「こんな高校生がいるんだ」と感動しました。その後、長野の平和ゼミナールに誘ってもらって学習会に参加したり、看護学生のときと就職後も合わせて4回も原水禁世界大会に参加してきました。毎回、被爆者の言葉は涙なしには聞くことができないです。平和な世の中にするために、少しずつ、自分にできることから始めようと思って活動してきました。わたしの全ての活動の原点は「核兵器をなくすこと、平和な世の中を作ること」だな、と思っています。

～基地が日常に溶け込んでいる呉市～

海上自衛隊呉基地の潜水艦

河野：斉藤さん、8月の原水禁世界大会に参加しての感想を聞かせてください。
斉藤：印象的だったのは、海上自衛隊の呉基地を巡るフィールドワークです。テレビのニュースで、軍事費を注ぎ込んで自衛隊の基地が増強されているということを知って衝撃を受けたので、もっと知りたいと思って申し込みました。実際の呉基地は、潜水艦、護衛艦が生活の中に溶け込んでいるようでした。長野で例えると、諏訪湖の湖畔に軍艦が浮いているみたいな景色です。すぐ近くにコンビニがあって、ジュースを買って飲みながら護衛艦を眺められるような距離感です。船や潜水艦が好きな子どもたちは喜んで見にきてしまうかもしれないと思いました。
これは人を殺しに行くものなんだ、敵の基地を攻撃する乗り物なんだということを教えないと、子どもたちにとってはただの「かっこいい船」に見えてしまいます。そして、医療介護福祉に回すべきお金を軍事に回しているということに憤りを感じました。日本製鉄呉製鉄所の広大な跡地を防衛省が買い取って、呉基地をバックアップするという計画もあるとのことです。市の産業にとって有益という理由で呉市長が推進しており、反対派の市民の意見は聞き入れてもらえない状況だそうです。原爆被害の記憶がある広島でも、意見が分かれてしまうのだとショックを受けました。「平和がいいけど、経済のために自衛隊を誘致しよう」と、あえて分断が作られていると思います。

～「長野反核医療者の会がある」行動の第一歩として～

河野：斉藤さんは、原水禁世界大会参加後に、長野反核医療者の会に入会してくださいました。その理由や想いを教えてください。
斉藤：平和記念式典で広島県知事が「国土も国民も復興不能な結末となる安全保障にどんな意味があるのか」と言っており、とても納得しました。人々を滅ぼす可能性のある核による防衛には意味はない、同じことを繰り返さないために自分もできることをやりたいと思いました。それから呉基地について学んで、国民が黙っていると政府や軍備で儲けようとする企業はどんどん進んでしまうということもわかりました。何か行動できることがないか、と思っていたときに「長野反核医療者の会がある」と思い出しました。あえて「医療者の会」になっているので、コメディカルである自分も入会できるし、身近な師岡さんもいることが後押しになりました。これからいろんな学習会に参加したいです。
河野：行動の一歩として医療者の会を選んでくださったことがとても嬉しいです。そして、医師だけでなく他職種の方とも活動するために「医療者の会」にして良かった～と思いました。

～事務局会議はワクワクする、貴重な場所～

河野：師岡さんは、2025年4月の第4回定期総会後から、事務局メンバーになってくださいました。その経緯や理由について教えてください。
師岡：総会のグループワークで話が弾んで、「事務局やりませんか」と誘ってもらいました。正直なところ、いろいろな活動をしていると忙しくて「事務局なんて大変そう。無理だよ」と思うところでした。でも、ちょうど総会では被爆80年ということで、「継承」について話し合われていました。自分も継承していくために一歩踏み出そう、殻を破ろう、と思って、事務局になることを決めました。
河野：師岡さんは、労働組合や様々な医療者の集まりで会について広めてくださっていて、本当にありがたいです。事務局になって思うことや気づきなどはありますか。
師岡：事務局会議楽しいのよ。いろいろなことを話せて「まだまだこれからいろいろできそう」とワクワクする、貴重な場所です。会議のはじめにそれぞれ近況報告をするので、ネタを作るために意識して新聞を読むようにしたら、反核平和に関する記事に今まで以上に目が行くようになりました。今、核戦争が起きてしまうのではないかと思うような状況だからこそ、ちゃんと注視しないといけないと思っています。

上田生協診療所の原爆の絵展

それから診療所では、高校生の原爆の絵展をやっています。今後10年で話せる被爆者がいなくなるかもしれないということで、高校生が被爆者から何度も話を聞いて、絵として残したものです。これも継承の大切な一つと知りました。
河野：仕事をしながら平和について活動するのは体力がいると感じていますが、お二人がお互いに元気を与える関係性なんだなと感じました。お二人が職場にいることで診療所の他のスタッフも、平和と医療が繋がる雰囲気を感じとっているのではないかなと思います。
師岡：来年の総会には、斉藤さんも一緒にいきましょう。わたしがシフトを組めばいいもんね(笑)
河野：ぜひ総会でお会いしましょう！